令和元年度「全日本中学生水の作文コンクール愛媛大会」

（知事賞）　優秀賞

Water for the future

今治市立近見中学校　三年　森　温大

水はめぐる。国境を越えて。世代を超えて。

タラップを降りる僕の頬を、冷たく乾いた風がひゅうと撫でる。成田空港から約十時間。日本と同様に周りを海で囲まれていながら、本土の一八％が砂漠であるオーストラリア。降水量が非常に少なく、人間が住む世界の中で最も乾燥している大陸。グレートディバイディング山脈の内陸側、標高約七〇〇ｍに位置する町トゥーンバ。ここが僕の派遣先だ。

一年で最も雨の少ない八月。十日間の天気予報に「雨」が一つもないことを、僕は無邪気に喜んだ。この気候条件こそが、ここで暮らす人々の抱える課題の一つだとも知らずに。

日本では、無尽蔵だと錯覚してしまいそうなほど、何不自由なく使っている水。しかし、世界に目を向けると、地形や天候の影響で、今なお水不足に悩む地域は少なくない。ホームステイ中、日本とオーストラリアにおける「水」に対する感覚差を、僕は何度も肌で感じた。水を取り巻く生活習慣の違いを、繰り返し学習して臨んだにも関わらず。

僕に任された仕事の一つが、飼っている家畜たちの世話だ。多くの牧場仕事を任せてくれたが、水関係だけは違った。家畜用には、大きな貯水タンクに溜めた雨水を使う。必要な時に、必要な量の水を出す。それらは必ずホストマザーが管理した。牧畜が盛んなこの町に暮らす人々の知恵であり、生活なのだ。

寒い日の朝。バケツの中で凍っている氷を捨てずに、室内の暖炉の前に置くように言われた。仕事を終えて見に行くと、氷はすっかり溶けて水になり、僕はそれを家畜たちに与えた。紛れもなく、「命の水」だった。水不足は死活問題。水は「生命線」だ。「氷を温めれば水に

なる。」こんな常識を生活の中で役立てることが、日本ではどれほどあるだろう。外で凍った氷を温めて使うという知恵を、僕らはどれほど持てるだろう。

「水は、あなたたちの生活を左右するもの。そして私たちの生活にとっても、大きな役割を持っていて、かけがえのないものよ。」東日本大震災の話をする中で、ホストファミリーたちは言った。そうだ。水は、時折全く異なる顔を見せる。移り変わる季節のように。

オーストラリアの人々にとって、「水問題」とは「干ばつ」を意味する。だが、日本に暮らす僕の頭にまず浮かぶのは、「治水」。両者は対極の問題を抱えているようで、その源流は同じ「一筋の水」である。水がもたらすもの。表裏一体の「恩恵」と「破壊」。

今、日本では、多くの人々のおかげで、安心安全な水を安定して利用できる仕組みが整備されている。僕らはそれを何不自由なく使う。しかし、その仕組みをたやすく打ち砕くものがある。災害だ。昨年発生した平成三〇年七月豪雨では、県内一二市町で最大三万一千戸以上が断水となった。三〇年以内に八〇％以上の確率で発生するとされる南海トラフ巨大地震もまた、甚大な影響を与えるだろう。僕たちは、非常時に気付かされる。いかに無意識に水を無駄遣いしていたか。断水を想定した防災意識は、そんな生活習慣を見直すことにもつながる。防災・減災を考える上でも、「水」は大切な軸となるはずだ。無意識でいられたのは、そういられるようにしていただいていたから。目に見えぬ幾多の努力の賜物だから。あの夏が、僕に教えてくれた。

水は、地球上に暮らす生物みんなが分け合い、継いできた唯一無二の資源だ。人間だけではない。紺碧の空の下、オーストラリアで世話をした牛や馬たち。食器を洗う時、洗濯をする時、シャワーを浴びる時、僕は彼らの顔を思い浮かべる。僕たちに必要なもの。それは、水を「意識する」感覚だ。自分以外の誰かの暮らしを「思い浮かべる」感覚だ。

水はめぐる。国境を越えて。世代を超えて。

この一筋を「未来のための水」に。僕たちは、水と共に生きるのだから。